

天理市埋蔵文化財調査概報

1986

天理市教育委員会

発刊によせて

埋蔵文化財の保存と開発との調和を図りながら、本年度における各事業計画の実施に先行して、事前調査を進めて参りました。

本概報は、年度内に実施した調査のうち、埋蔵文化財調査報告書によるものを除いて作成したものです。

この内容については、1.柳本藩邸跡（第2次）・天理市立柳本小学校校舎新增改築事業、2.袋塚古墳・都市計画道路勾田櫻木線新設工事、3.合場遺跡（第3次）・農道及び水路改修工事、さらに、本年度内に立会調査を実施したなかで、1.長寺遺跡（第2次）・集会所改築工事、2.別所城跡・造成工事については、調査範囲が極端に限定されていましたが、これらの遺跡の性格をうかがえるものと、ここに資料としてまとめました。

この中には、さらに次回調査を予定されているものもあり、継続調査の成果を見守りたいものです。

最後にあたり、発掘調査開始から、ここにまとめられるまでに、多くの方方のご指導ご協力をいただいたことに対し、深く感謝申し上げ、この概報が、多くの研究者へ貢献しながら、次への展開を祈念して止みません。

昭和61年3月

天理市教育委員会

教育長 中野 康治

例　　言

1. 本概報は、天理市教育委員会が昭和60年度に実施した遺跡の発掘調査のうち、柳本藩邸跡（第2次）、袋塚古墳、合場遺跡（第3次）の調査概要である。

本年度内の立会調査のうち、長寺遺跡（第2次）、別所城跡の調査については、今後の調査との関連も十分考慮されるので、この概報により、概要について報告することとした。

なお、星冢・小路遺跡—中の番号6（原因者、トーメン不動産株式会社）、櫻本高塚遺跡—中の番号7（原因者、積水化成品工業株式会社天理工場、調査主体、高塚遺跡発掘調査団）、柳本遺跡—中の番号8（原因者、輪辺村木材住宅）の報告書は別途刊行を予定している。

2. 調査は、天理市教育委員会が実施し、現地は、社会教育課 泉 武が担当した。調査の補助と遺物整理は、山田圭子、瀧本富美子、巽 信子、松岡富子と高田博司、前田博史、松浦康子、橋本和子、松原理恵の学生の協力を受けた。

3. 本概報の編集は、天理市教育委員会が行い、本文については泉 武が執筆した。

本概報中の遺物は、教育委員会で保存処理を行い、順次展示公開の予定である。

目 次

1. 柳本藩邸跡（第2次）	2
2. 袋 塚 古 墳	6
3. 合 場 遺 跡（第3次）	12

立 会 調 査

1. 長寺遺跡（第2次） 挿図1中の番号4	15
2. 別所城跡 挿図1中の番号5	18

挿 図 目 次

図 1. 昭和60年度遺跡調査地点	1
図 2. 柳本藩邸跡（第2次） 調査地点（斜線）	2
図 3. 柳本藩邸跡（第2次） 調査トレンチ	3
図 4. 柳本藩邸跡（第2次） 南壁土層断面図	3
図 5. 柳本藩邸跡（第2次） 遺構検出図	3
図 6. 柳本藩邸跡（第2次） SX 2 遺構図	4
図 7. 柳本藩邸跡（第2次） 出土埴輪	4
図 8. 袋 塚 古 墳 調査地点（斜線）	6
図 9. 袋 塚 古 墳 遺構検出平面図	8
図10. 袋 塚 古 墳 周濠内土層断面図（南壁の一部）	8
図11. 袋 塚 古 墳 出土土器	9
図12. 袋 塚 古 墳 出土盾形埴輪	10
図13. 袋 塚 古 墳 井戸跡 1,2 出土土器（6：井戸跡 1）	10
図14. 袋 塚 古 墳 遺物包含層出土鏡	11
図15. 合 場 遺 跡（第3次） 調査地点	12
図16. 合 場 遺 跡（第3次） 遺構検出図	13
図17. 合 場 遺 跡（第3次） 土 坑	13
図18. 合 場 遺 跡（第3次） 土坑出土土器	14
図19. 長 寺 遺 跡（第2次） 調査地点（斜線）	15
図20. 長 寺 遺 跡（第2次） 調査地平面図	16
図21. 長 寺 遺 跡（第2次） 出土軒丸瓦	16
図22. 別 所 城 跡 調査地点（斜線）と堀跡	18
図23. 別 所 城 跡 堀内調査地区平面図	19
図24. 別 所 城 跡 堀内土層断面図（西壁）	19
図25. 別 所 城 跡	
堀内出土遺物(1.須恵器, 2~7, 10~15.土師器, 8, 9, 16~21.陶磁器)…	21
図26. 別 所 城 跡 堀内出土軒丸瓦	22

図版目次

図版 1. 柳本藩邸跡 (第2次) 遺構	23
図版 2. 袋塚古墳 遺構	25
図版 3. 袋塚古墳 遺構	27
図版 4. 合場遺跡 (第3次) 遺構	29
図版 5. 長寺遺跡 遺構・遺物	31
図版 6. 別所城跡 遺構	33
図版 7. 別所城跡 遺構	35

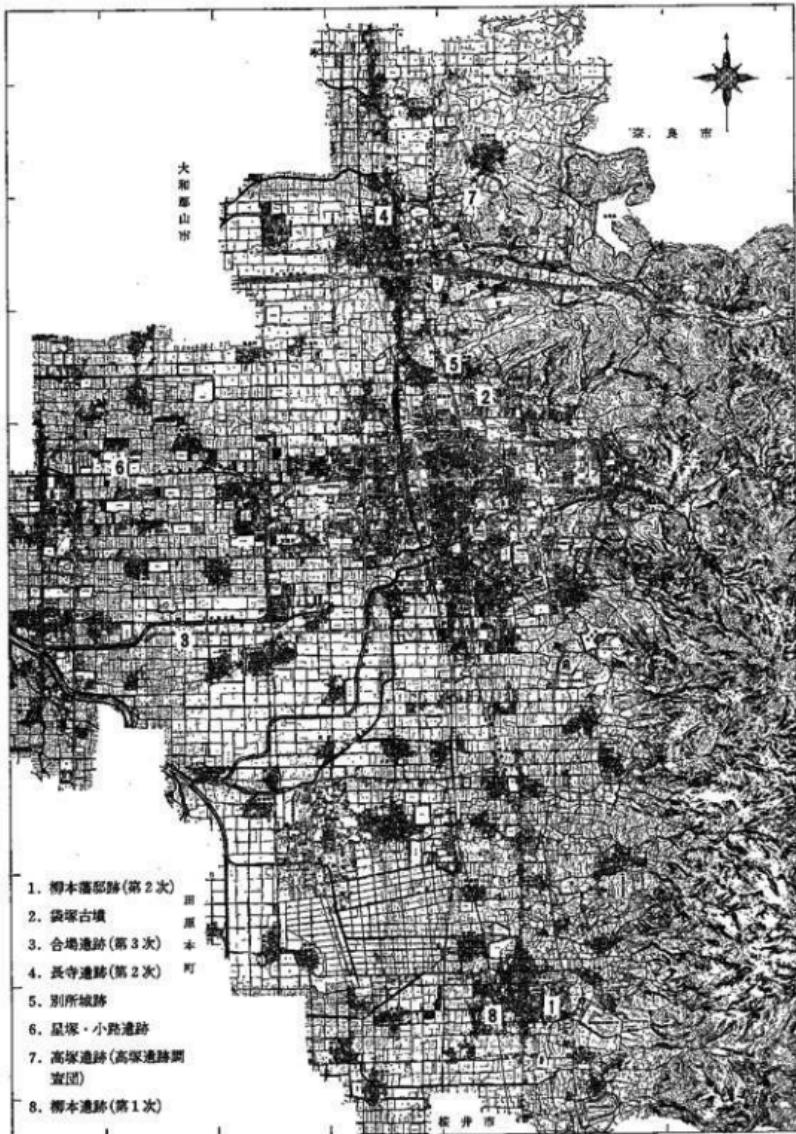


図1 昭和60年度 遺跡調査地点

1 柳本藩邸跡（第2次）—柳本町

1 調査の契機と経過

現在、天理市立柳本小学校になっている柳本藩（織田氏）邸跡の調査は、第1次を昭和59年度に実施した。今回の第2次調査は、同校東北部での市立柳本小学校校舎新增改築工事に先立って行った。



図2 柳本藩邸跡（第2次） 調査地点（斜線）

調査は昭和60年7月22日に開始し、同月27日に終了した。調査対象地は、約200m²の面積であったが、発掘調査ができたのは、約80m²にとどまった。

2 調査の概要

調査区は、建物跡地のほぼ中央部に、東西5m、南北15mのトレンチを設定した。

南面する土層の堆積は、地表面より65cmまで、学校建築時の整地層で、この層には、瓦を含む建設残土が重なっていた。この面の下部より5.5cmでは、黒灰色の炭化層がみられた。断面での広

1 柳本藩邸跡（第2次）

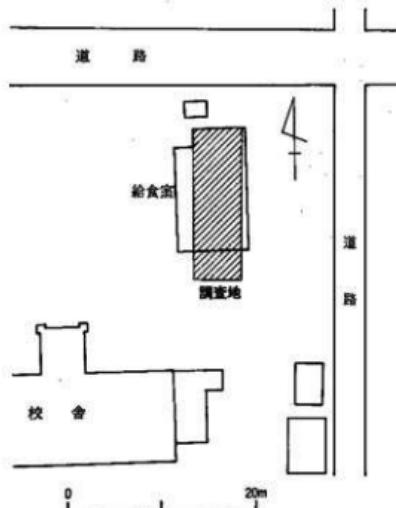


図3 柳本藩邸跡（第2次） 調査トレンチ

がりは、トレンチ西南隅より東へ約1.2m程もあり、10cm以上の厚みがみられ、文政13年（1830）の藩邸火災時の焼土面と考えられる。焼土面より下部は、約40cmの疊含みの砂層の堆積がある。この間は、寛永年間の藩邸造営時の整地面と考えられよう。

この2時期の遺構面のうち、今回は藩邸再興時の遺構面を調査するにとどまった。

検出できた遺構は、土坑8、溝4、その他5である。遺構は相互に切り合いが激しく、まとまらなかった。また、遺構からの遺物もほとんど出土しなかった。

溝1は、調査区の中央を南北方向に通っている。その規模は、幅約1m、深さ約20cmである。

土坑2は、中央付近にあり、直徑1m、

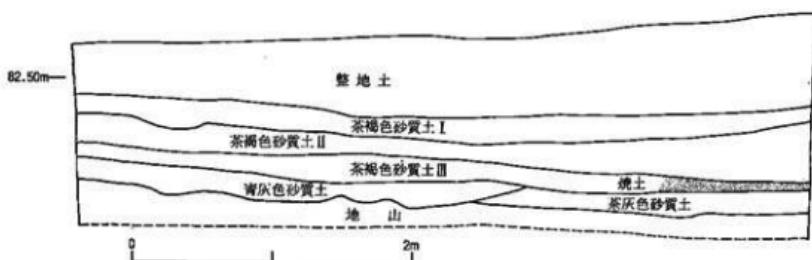


図4 柳本藩邸跡（第2次） 南壁土層断面図

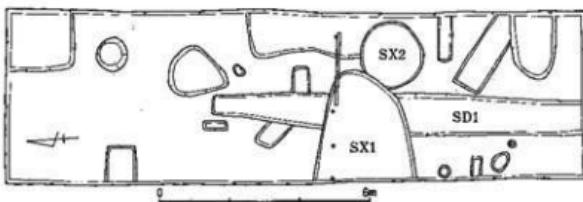


図5 柳本藩邸跡（第2次） 遺構検出図

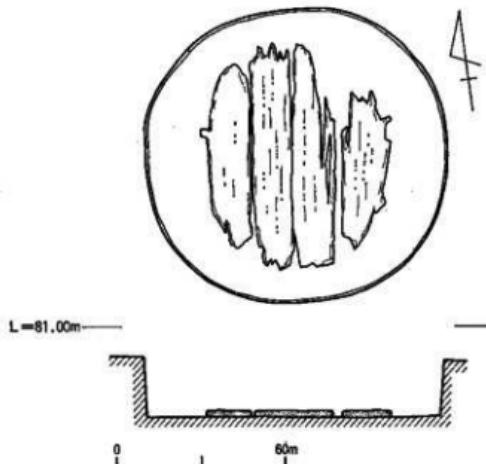


図6 柳木藩邸跡（第2次） S X 2 造構図

深さ20cmあり、壁は垂直に立ち上がっている。底部は平坦で、この中に直径80cmの円形の底板が、4枚の板材によって組まれていた。

3 出土遺物

出土遺物の大半が学校建設時の整地層からのものであり、まとまったものはなかった。このうち 固化したものは、遺物包含層中より出土した埴輪片である。4点とも円筒埴輪片である。

外面の調整は、タテハケの後に、ヨコハケを施している。内面はヨコハケ調整である。タガは台

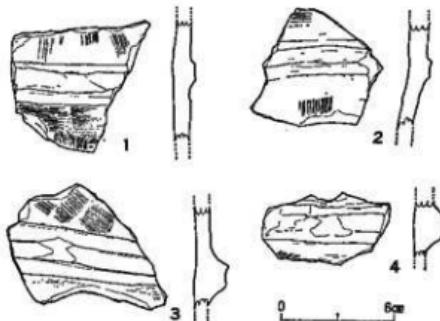


図7 柳木藩邸跡（第2次） 出土埴輪

形であるが、突出度は低い。

当遺跡の北にある黒塚古墳からは、埴輪は採集されていないが、ここに由来するものかもしれない。

4 ま　と　め

以上のように、調査対象面積が限られたため、見るべき遺構は検出されなかつたが、文政13年の藩邸焼失にともなう、炭化層の堆積が確認されたことは、今後の藩邸跡の調査を行う上で、鍵層として重要な手掛りとなろう。また、遺物中に5世紀代の埴輪片を見いだしたことは、黒塚古墳によるものか、あるいは、それ以外の古墳が、かつてこの地域に存在していたことを十分うかがわせる資料である。

（参考文献）

- 1 「柳本墓跡」（『天理市埋蔵文化財調査概報 昭和58・59年度』） 1985 天理市教育委員会

2 袋塚古墳一別所町

1 調査の契機と経過

天理市建設部都市計画課より、昭和60年度事業の一環として、都市計画道路別所線の工事に伴う遺跡踏査願が市教育委員会に提出された。当該地は『奈良県遺跡地図』第1分冊、8D-313の古墳（消滅）にあたり、また『奈良県山辺郡誌』中巻によても、古墳の存在していたことは明らかであった。このため、都市計画課との協議により、主要部は民家の立ち退きをまって発掘調査を実施することになった。当初の計画では、東西線へ南北線がT字状に接続する地点の東と西側の2か所を調査する予定であったが、西側については工事が延期されたため、東側だけを調査した。

現地調査は、昭和60年9月25日に開始し、11月13日に終了した。

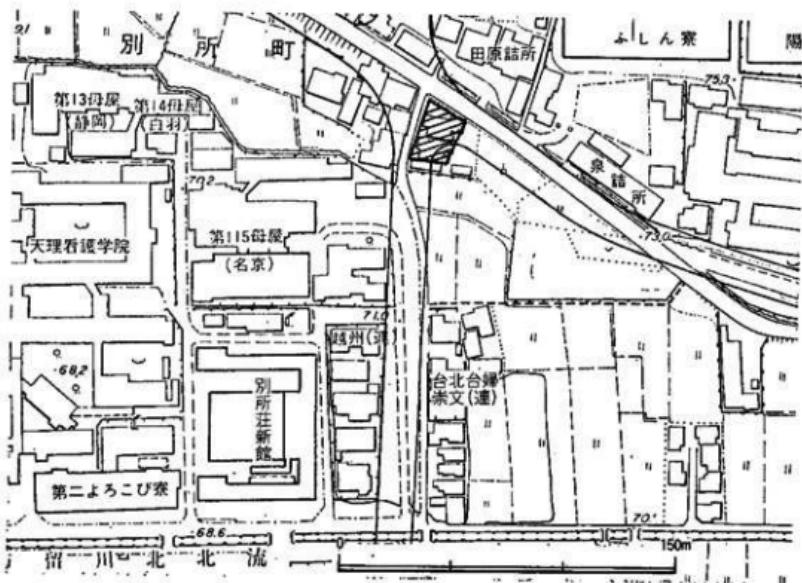


図8 袋塚古墳 調査地点（斜線）

2 歴史的環境

この地域は、いわゆる豊田山丘陵の南側にあたる。西南にのびる丘陵上には、いくつかの古墳が現存している。その中で最大の古墳は、別所大塚古墳である。全長約115m、前方部幅約90m、高さ約8m、後円部径約75m、高さ約15mの前方後円墳である。後円部を南西に向かって、西側には周濠跡も残っている。内部主体は、横穴式石室と考えられる。

ここより200m南の丘陵を下った地点には、南北に主軸をもつ前方後円墳である別所鎌子塚古墳がある。墳丘規模は全長約47m、後円部径約22m、高さ約4.5m、前方部幅約31m、高さ約5mと、中規模であるが、周濠の痕跡もみとめられる。内部主体は、前方部には剝抜式石棺が露出していたようである。後円部は横穴式石室と推定される。

以上の古墳のほかに、今回検出した袋塚古墳と、別所大塚古墳の西南約160mにある天理市立山の辺小学校にも周濠を有する北面の前方後円墳が存在していた。このようにみると、豊田山丘陵の北東側のウツナリ古墳、石上大塚古墳を中心とする大古墳群に劣らぬ古墳群が、同丘陵の南側にも存在していたことが想定される。

3 調査の概要

調査地区は、南北線の東側の民家が2棟建っていた地点で東西約40m、南北20mの範囲である。排水の関係から、全面にわたる掘削はできず、実施面積は約400m²にとどまった。未調査の部分については、必要に応じてトレンチを設定し、不足を補った。

検出した遺構は、古墳1基と、中世井戸跡2基である。古墳は前方後円墳の前方部からくびれ部を含めた後円部の一部である。全体の規模からは、 $\frac{1}{5}$ 程度を検出できたにすぎない。前方部は、くびれ部から南へ8mにわたって検出し、後円部はテラス状の段を設け、上段は円弧をつくっている。盛土は残存していなかった。

1段目の復原直径は約12mあり、周濠底との比高差は約50cmで、くびれ部から前方部にかけての一体成形によって、前方後円を形作っている。2段目は、直径約8mである。以上のことから、墳丘全長約50mで、後円部を北に向いている。

周濠は、東へ幅約8.5mあり、底部は北から南へ傾斜している。周濠部も加えると全長約70mに復原できよう。これは、北に隣接する別所鎌子塚古墳と同一の規模をもち、しかも、後円部が接し合う程度に接近して築造されていたことがわかる。

周濠内の堆積は、南壁でみると地表より約2mである。古墳時代の堆積は下の2層のみで、灰白色を呈し、埴輪、須恵器、土師器などを多く含んでいた。これより上層は、瓦器を含む中世以降の

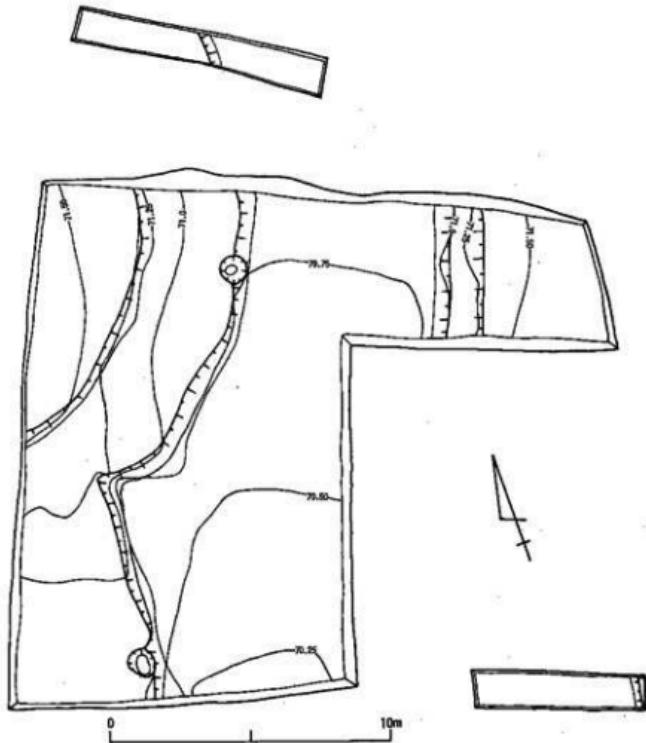


図9 袋塚古墳 遺構検出平面図

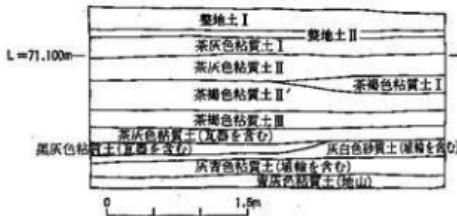


図10 袋塚古墳 周濠内土層断面図 (南壁の一部)

堆積である。

井戸跡は墳丘部に穿たれていたもので、井戸の掘削時には古墳も破壊されたと考えられる。井戸跡 1は、前方部にあり素掘である。直径約90cmの横円形を呈し、深さは約80cmである。井戸内堆積より土師器、土釜、瓦器片などが出土し、底部より瓦器碗が出土した。

井戸跡2は後円部にあり、東西約1.2m、南北約90cm、深さ約34cmである。遺構面には、人頭大の自然石が散乱していた。石積井戸であったのが壊れたものと思われる。井戸内より土師器皿が出土した。

4 出土遺物

出土した遺物は、周濠内より埴輪、須恵器、土師器、さらに、中世井戸跡2よりの瓦器、土師器、土釜などである。

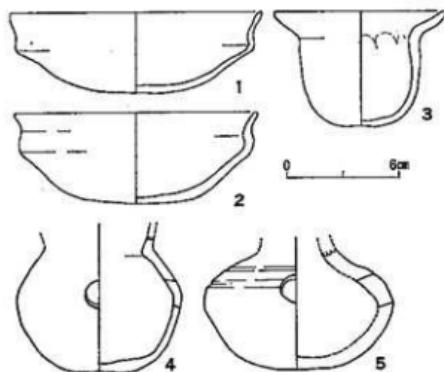


図11 袋塚古墳 出土土器

周濠内の遺物のうち、1、2は、土師器杯である。口縁部径はそれぞれ12.4cm、12cmあり、器高は4.3cm、4.8cmである。共に体部で屈曲し、口縁部は外上方に広がる。器壁が薄く、また深みがあるのも特徴的である。3は、口縁部が極端に広がっている。口縁部径9.2cm、器高6cmあり。体部は径6.5cmである。4は、小形壺の体部に穿孔がある。5は、須恵器壺である。肩部に2本の凹線がみられるものの、加飾はみられない。体部最大径10cm、体高6.4cmである。

埴輪は、円筒埴輪片と盾形、家形などの器財の2種類である。本概報には盾形埴輪を図化した。
盾形埴輪 くびれ部周濠内より出土した。円筒状の両側に偏平な鰯部を付けている。頂部は欠けている。鰯幅は約25cmであるが、旧状を保つ部分はない。高さは約21cmである。体部は、横断面梢円形を呈している。裏側はタガが付く。盾面の文様は鰯部が鋸齒文、内区は盾形と、その上方には鋸齒文が縦刻されている。内区盾文様の上部と、鰯部の2か所に、直径5mmの穿孔がある。孔は丸く、棒状工具によっているとみられ、表面外上方から裏面下方へと斜方向である。調整は摩滅がひどいため観察できなかった。

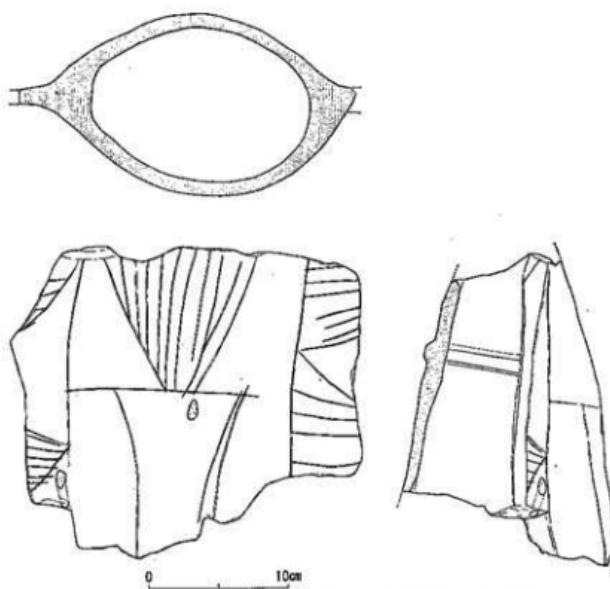


図12 袋塚古墳出土 堀形埴輪

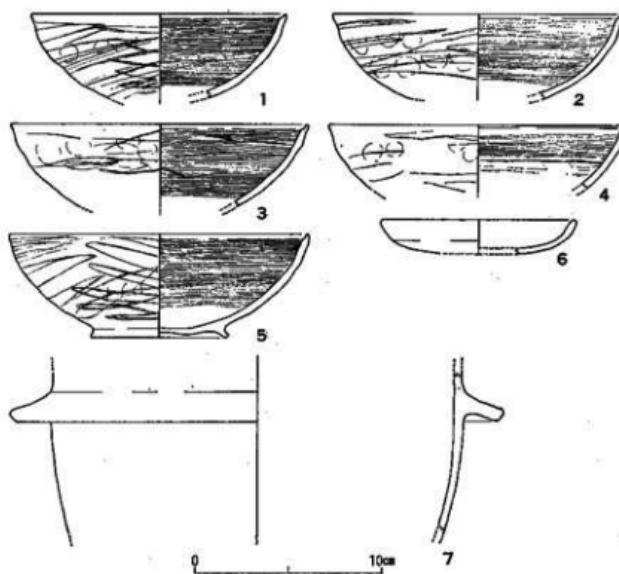


図13 袋塚古墳 井戸跡1,2出土土器 (6: 井戸跡1)

井戸跡2出土の瓦器碗は、1～5である。口縁部径は12.5～15.9cmあり、5は器高5.5cmである。いずれも内面の調整は細かいミガキ、外面は荒いミガキである。5の内面見込みは、一連の連結輪状文が施されている。12世紀中ごろの所産と考えられる。

また、茶灰色粘質土層中（瓦器を含む）より、鏡片が出土した。出土地点は東壁際であり、遺構は伴っていないかった。

瑞花八稜鏡 長辺約9cm、短辺約4cmである。復原すると直径約9.6cmである。鏡中心部の厚みは1.25mm、鏡縁部では4mmである。文様面は中心より3.5cmで1本の界線により、内区と外区に区分されている。内区は草花文で、茎の尖端には苔がある。外区は葉のみである。銅質は良質で平安時代前期に比定されよう。^(注1)

5 ま と め

袋塚古墳の調査は、約300m²の面積にとどまったが、周濠を有する全長50m近くの前方後円墳であったことが確認された。盛土部分は完全に削平されていたものの、規模、主軸方向などの状況が判明したことは、この周辺の古墳を考える上で重要な資料となろう。このようにみると、豊田山丘陵の南側には4基の前方後円墳で構成された古墳群が復原できよう。

（注）

1 純は櫛原考古学研究所附属考古博物館 勝部明生、菅谷文則両氏に御教示を得た。



図14 袋塚古墳
遺物包含層出土鏡

3 合場遺跡（第3次）—合場町

1 調査の契機と経過

当遺跡は、合場町を中心として西へ大きく広がる。過去2回の調査により古墳時代の土坑、条里界溝、環濠などが判明した。今回の調査は合場町の集落の西約200mの地点である。都市計画道路天理王寺線を起点として、南へ約300mが天理市経済部農林課の事業によって農道及び水路が改修されることになった。このため、市教育委員会が当該地内の調査を実施した。調査は昭和60年12月2日に開始し、61年1月8日に終了した。

2 調査の概要

当該遺跡内の施工内容は、農道の幅員拡張と水路の改修である。このため水路部を含めた幅約9mが調査対象となった。農道は、頻繁に使用されていることもあって、調査から除外せざるを得なかった。水路については、工事掘削が50cmに満たない部分もあり、工事の諸条件によって変則的な調査となつた。都市計画道路天理王寺線より南へ約95mの区間は、農道より東側で調査を実施し（1区）、さらに南へ、西側部分で調査を行つた（2・3区）。



図15 合場遺跡（第3次） 調査地点

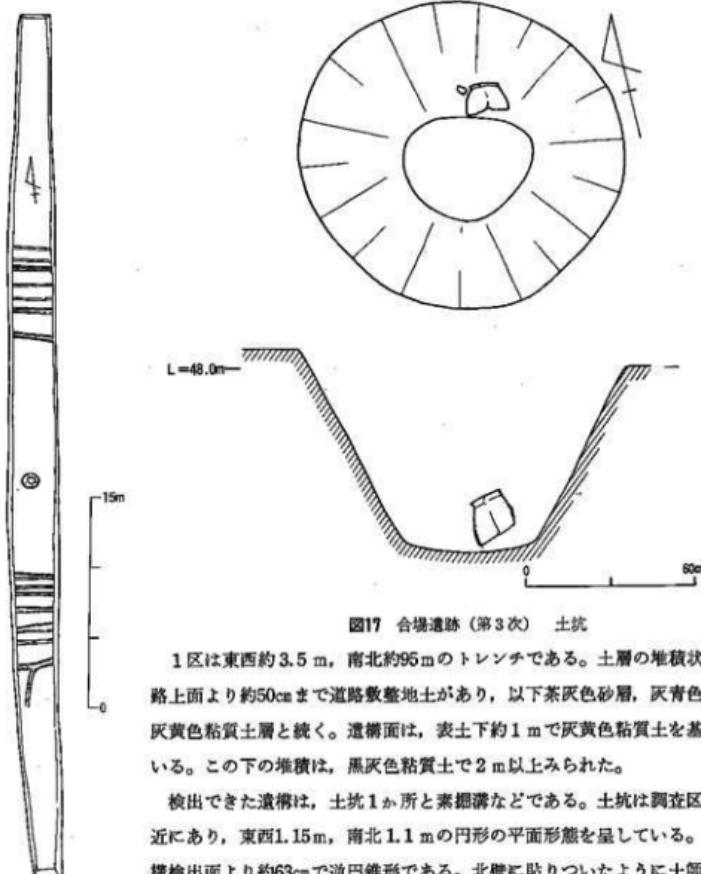


図17 合場遺跡（第3次） 土坑

1区は東西約3.5m、南北約95mのトレンチである。土層の堆積状況は、道路上面より約50cmまで道路敷地土があり、以下茶灰色砂層、灰青色粘質土層、灰黄色粘質土層と続く。遺構面は、表土下約1mで灰黄色粘質土を基盤としている。この下の堆積は、黒灰色粘質土で2m以上みられた。

検出できた遺構は、土坑1か所と素振溝などである。土坑は調査区の中央付近にあり、東西1.15m、南北1.1mの円形の平面形態を呈している。深さは遺構検出面より約63cmで逆円錐形である。北壁に貼りついたように土師器甕が出土した。

素振溝は12条検出したが、いずれも東西方向に流路がある。南側の溝は幅約30cm程度、北側では幅約1mであった。これらの時期は不明である。

2、3区は、農道の西側を230mにわたって調査した。2区の中央部の土層は、耕作土、床土、暗灰色粘質土、暗灰茶色粘質土、茶褐色粘質土、黒灰色粘質土である。この調査区では、東西幅が十分取れないこともあって遺構は検出できなかった。

3 出 土 遺 物

土坑から出土した土器は、古墳時代の壺と弥生時代の壺の底部である。壺2は口縁部径13.6cm、体部最大径16cm、残高12cmである。口縁部は1cmで短く、端部は角頭形で、口唇部は上方につまみ上げている。肩部から体部にかけては、細形で脇張りではない。スヌが全面に付着しているが、体部はタテのハケ調整である。内面も細かいハケ調整である。この壺は、形態的には肩が張らない長胴型で、内外面ハケ調整の手法を用いており、いわゆる庄内型壺とは異なる特徴である。しかし、時期については、繩向2式併行期と考えられる。

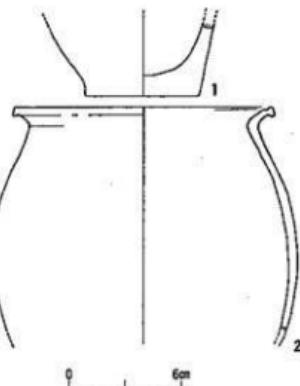


図18 合場遺跡（第3次） 土坑出土土器

4 ま と め

昭和55年の都市計画道路天理王寺線建設工事の際の調査（第1次）では、第4トレンチ以東において古墳時代の土坑、溝などが多数検出された。今回の調査は第4トレンチと第3トレンチの中間付近にあたっているところから、当遺跡は、さらに西へ広がっているものと考えられる。ただ、中心部よりは濃密ではないようである。また、今回検出した土坑と第1次の遺構群とは若干の時期差もある。

（参考文献）

- 1 藤井利幸「合場遺跡」（『奈良県遺跡調査概報 1980年度』） 1981 奈良県立橿原考古学研究所編
- 2 「合場遺跡（第2次）」（『天理市埋蔵文化財調査概報 昭和58・59年度』） 1985 天理市教育委員会

立会調査

1 長寺遺跡（第2次）—桜本町

1 調査の契機

長寺遺跡は、昭和55年に天理市桜本町字長寺において、市立桜本公民館の増築に伴う発掘調査により、遺構の一部が検出された。今回の調査は、桜本公民館の南西に所在する高良神社境内地の集会所の改築に伴う事前調査である。調査は、集会所南側に幅2m、東西11mのトレンチを設定して遺構の確認を行った。現地調査は、昭和60年11月7日に開始し、同月12日に完了した。

2 調査の概要

調査区は、集会所と参道の空間地にトレンチを設定した。高良神社境内地は周辺より一段高く、この付近では旧状を最も良く保存していることが予想され、また、これまで多くの瓦当が採集されていた様である。調査の結果、表土下約40cmは神社の整地土であることが判明した。遺構面までは約1mであったが、堆積土中には中世土器も含んでいた。遺構面は茶褐色の砂質土で堅くしまった土層を形成し、前回調査した遺構面と同じ状態がみられた。しかし、土坑や柱礎などの遺構は検出できなかった。小面積の発掘調査であったのにもかかわらず膨大な量の瓦が出土し、寺院の中心遺構であることが十分に想定できる。

3 出土遺物

瓦類は、大半が平瓦であったが、軒丸瓦が3点出土した。

1は、単弁8弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当文様は、やや粗雑である。蓮弁は盛り上がり、肉厚である。

2は、複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁はやや短かく、また蓮弁、子葉とも肉厚に表現されて



図19 長寺遺跡（第2次） 調査地点（斜線）

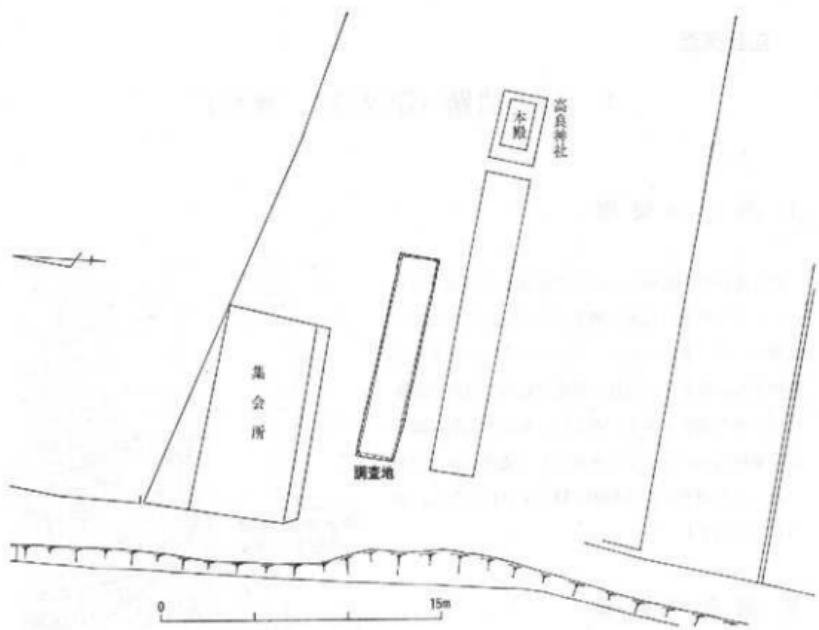


図20 長寺遺跡（第2次） 調査地平面図

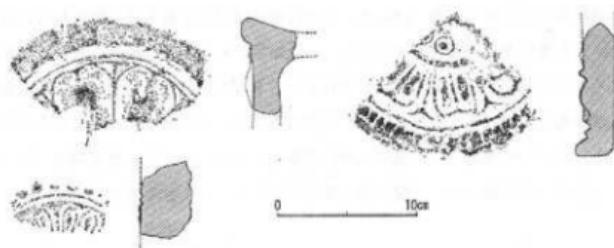


図21 長寺遺跡（第2次） 出土軒丸瓦

いる。中房も高い。外区内縁には鋸歯文がめぐるが不揃いである。ただ、外縁は高く、文様構成の明確なつくりである。

3は、複卉8弁蓮華文軒丸瓦である。蓮華は小ぶりで、盛り上がりに欠けている。外区内縁には、珠文帯をめぐらせてている。外区内縁の直径は約12cmあり、1、2に比べて小形である。

4 まとめ

今回の調査は、限られた面積であったことから遺構の確認はできなかった。しかし、軒丸瓦が3種類出土したことにより、寺院の創建が奈良時代前期までさかのぼり、その後少なくとも天平年間までは伽藍を保っていたものと考えられる。また、2は、石上庵寺跡、3は、柿本寺跡出土の軒丸瓦とよく似ており、いずれも、長寺遺跡と近距離に推定地があるところから、密接な関連も想定できる。

（参考文献）

- 1 泉 武「長寺遺跡」（『奈良県遺跡調査概報 1980年度』）1981 奈良県立橿原考古学研究所編

2 別 所 城 跡 一別所町

1 調査の契機と経過

当遺跡は天理市別所町字里中 355-1・355-2・356-2番地の転用に伴い発掘届が提出された。当初は『奈良県遺跡地図』第1分冊、8D—314の古墳にあたるものと考えられたが、現地において立会したところ、土壘と堀割であることが確認された。工事内容が、この土壘を削平して埋め立てられることから、地主との協議の結果、堀部分について発掘を実施することになった。調査は昭和60年11月18日より4日間を費した。

2 別所城について

当城は、『奈良県山辺郡誌』中巻、および『日本城郭大系』⁽¹⁾ 10 に詳しい記載がある。村田修三氏の解説によると、別所城は当地の土豪である萩別所氏の築城になり、室町時代には構えがあつたらしく、萩別所氏の名は、永正3年(1506)豊井で討死した者の中に含まれているようである。

当城は、豊田山丘陵から西南に派生した丘陵の先端部にあたり、別所町の大半が城郭内に入っている。堀は北側で竹藪となり、良好に残存している。主要部は東西160mあり、東北隅では南へ直角に折れ、西隅は、ゆるやかにカーブして南へ折れている。堀の両側には土塁が残存している。



図22 別所城跡 調査地点(斜線)と掘跡

3 調査の概要

調査地は、別所町の北側からの出入口にあたる、字北口の一角である。この部分は堀が切れており、いわゆる「土橋」があったかもしれない。

調査地での測量によると、外側の土墨は上面4～5mの平坦面をつくっている。内側では山形を呈している。この間は幅約14mあり、深さは約5mである。堀内は現状ではU字形を呈している。

堀内も竹根がはびこっているため、任意の地点に幅2mのトレンチを設定した。この結果、堀底については、現況底部より約2mの深さがあり、外側土墨の上面より堀底までの深さは7mである。

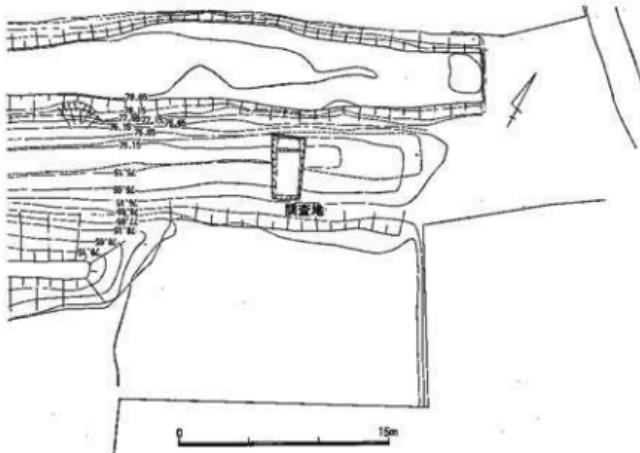


図23 別所城跡 堀内調査地区平面図

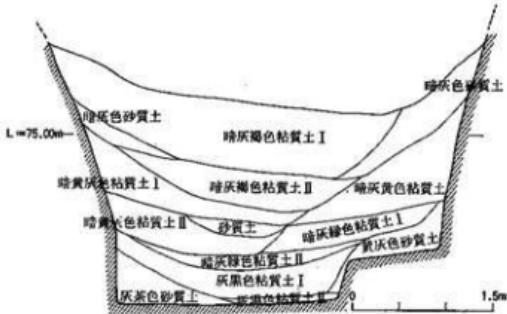


図24 別所城跡 堀内土層断面図（西壁）

ことが確認できた。この間の堀内堆積は3層に大別できたが、下層からも江戸時代の陶磁器片が出土するため、相当長期にわたって堀底を渡えていたことも考えられる。

堀底部は平底で外側には大走り状に幅1.0mの段を残していた。側壁は、やや法面をもつが垂直に近い切土である。

4 出 土 遺 物

遺物は各層より多量に出土したが、その主なものは、土釜、土師器、陶磁器、屋瓦などであった。ただ、最下層を除いて、出土遺物に混乱が生じており、また、土層についても明確な分層はできない状態であった。このことは、城の消滅時以降の、これら各種遺物のあり方に関連があるものと思われる。本概報では、出土遺物の主なもの一部を報告した。

須恵器杯身(1) 口縁部径約11.4cm、器高4.3cmあり、立ち上がり部が長く、受部もしっかりとつくりである。体部のヘラケズリは体部下辺まで丁寧にしている。須恵器は、この外にも2、3片出土しており、いずれもI型式後半である。当城を築造する際に、古墳が破壊された可能性も考えられる。

土師器皿(2~7) 2~6は、口縁部径6.6~7.2cm、器高1.5~1.6cmの範囲におさまる法量である。7は、口縁部径10cm、器高2.1cmである。

土師器土釜(10~15) 口縁部径16~21cmあり、口頸部は、くの字形に屈曲している。口縁端部は、いずれも角頂形を呈し、凹線の入るものもみられる。また、端部が内側に折れ込むもの(10)もある。鉢は、約1.5cmと幅が狭い。厚みは5mmで、薄いつくりである。

陶磁器(8, 9, 16~21) 茶碗、碗、碟利、皿、油壺などの器種がある。

茶碗(8, 9) 8は、口縁部径9.9cm、器高5.3cmである。口縁部で内側へすぼまり、端部は外反する。内面全体と体部上半分は、白磁釉薬が施され、一部釉の流れがみられる。9は、口縁部径10.6cm、器高6cmである。8と同形態を呈する。釉薬は鉄釉で、内外面全体に施されている。黒色がベース地であるが、茶褐色の斑晶がみられる。8, 9は、美濃焼の天目茶碗であろう。

瓶(16) 残高14.4cm、体部最大径10.5cmである。蓋付には砂が付着している。文様は、鳥、竹、草花である。

油壺(17) 口縁部径2cm、器高7.5cm、体部最大径8.6cmである。体部が張り、頸部がすぼんで短かい。色調は灰朱がかった白色である。文様は、梅の木と蕾が13か所に描かれている。

碗(18, 19) 18は、口縁部径10.6cm、器高6.5cmあり、高台は2cmと高い。体部は松と菱形文を描いている。19は、口縁部径13cm、器高5.2cmである。口縁端部は外反している。器表は唐草を描き、内面口縁部には幾何学文様を描いている。

皿(20, 21) 20は、口縁部径14.4cm、器高3.9cmあり、器表は唐草、内面は草花文、見込みには手描5弁花文を描いている。高台裏に印文がある。21は、口縁部径19.1cm、器高5.5cmである。

器表は唐草、内面は草花文を描いている。見込みと高台裏に印文がある。

16~21は、肥前系の焼物であろう。

軒丸瓦（1～3） 巴文軒丸瓦である。1は、巴の尾が互いに結合する。頭部は大きく接し合っている。珠文は小ぶりで、17個配置する。2、3は、巴の尾が接合しない。珠文はやや大きく、16個配置している。

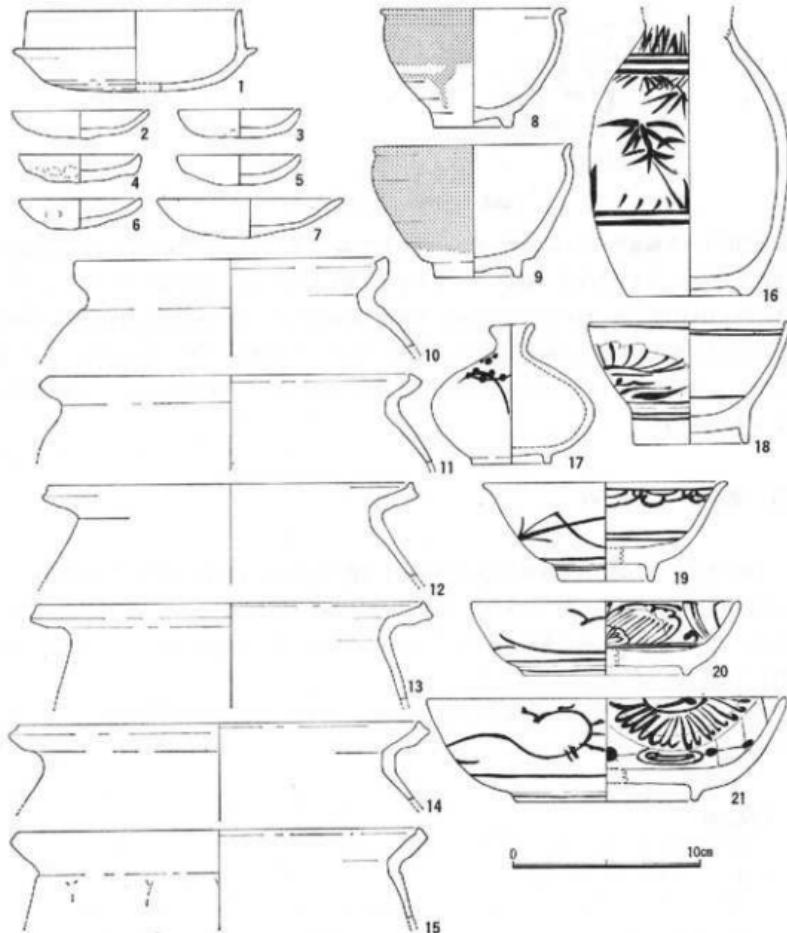


図25 別所城跡 堀内出土遺物 (1.須恵器, 2~7, 10~15土師器, 8, 9, 16~21陶磁器)

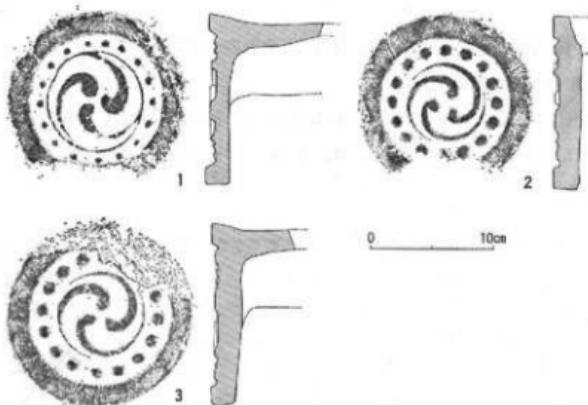


図26 別所城跡 窯内出土軒丸瓦

掘内出土の各種遺物のうち、時期が推定されるものは、土釜、陶磁器、巴文軒丸瓦などである。美濃焼茶碗は、井上喜久男氏の編年では、登窓I・II期と考えられる。肥前系陶磁器のうち、見込みに胎土目の日跡が残る碗破片は3点あり、大橋康二氏によると、伊万里焼の窯詰技法では、16世紀末から17世紀初頭に胎土目積から砂目積に転換していることを指摘された。⁽⁴⁾土釜の資料は完形品がなく、形態を細部にわたって分析できない。しかし、出土層位は下層に限られており、15~16世紀の所産であろう。

5 ま と め

文献史料からうかがわれる萩別所氏の動向と出土遺物の時期は、まだ100年程度の隔りがある。これは考古資料の残り方に問題があるのか、築城時期が1500年代より多少ずれ込むのか、にわかには判断できない。限定された発掘面積であったため、今後は下層中の遺物について、さらに資料の増加が必要であろう。

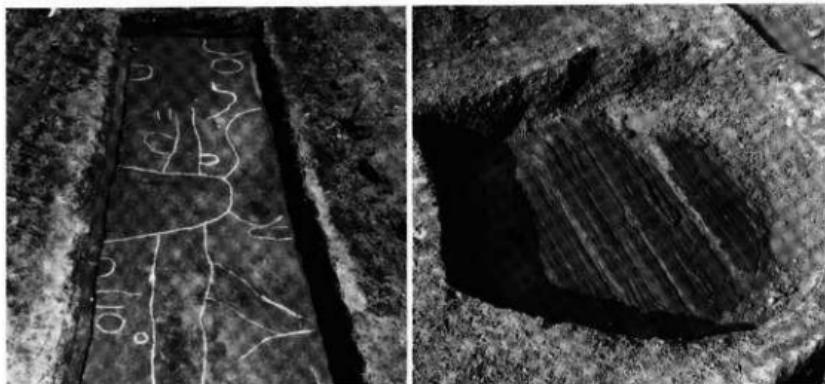
また、堀は土砂の堆積状況や陶磁器の出土状況から、江戸時代後期まで、空濠であったことが考えられる。

(参考文献)

- 『奈良県山辺郡誌』中巻
- 『日本城郭大系』10 1980より村田修三氏の「別所城」(348頁)を参照した。
- 井上喜久男「16世紀の瀬戸・美濃窯」(『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会) 1985
- 大橋康二「伊万里磁器創成期における店津焼との関連について」(『佐久間重男教授退休記念 中国史・陶磁史論集』) 1983



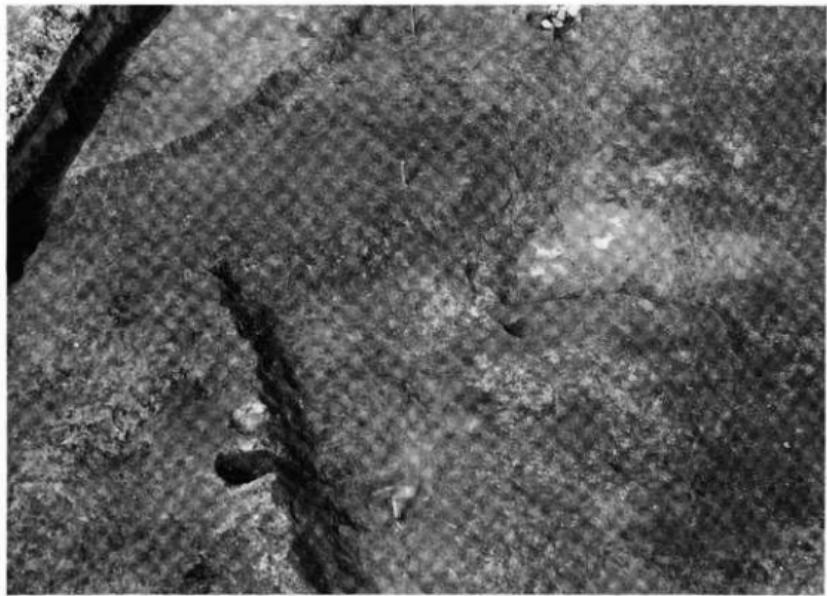
1. 遺構検出状況



2. 遺構検出状況



1. 遺構検出状況



2. くびれ部検出状況



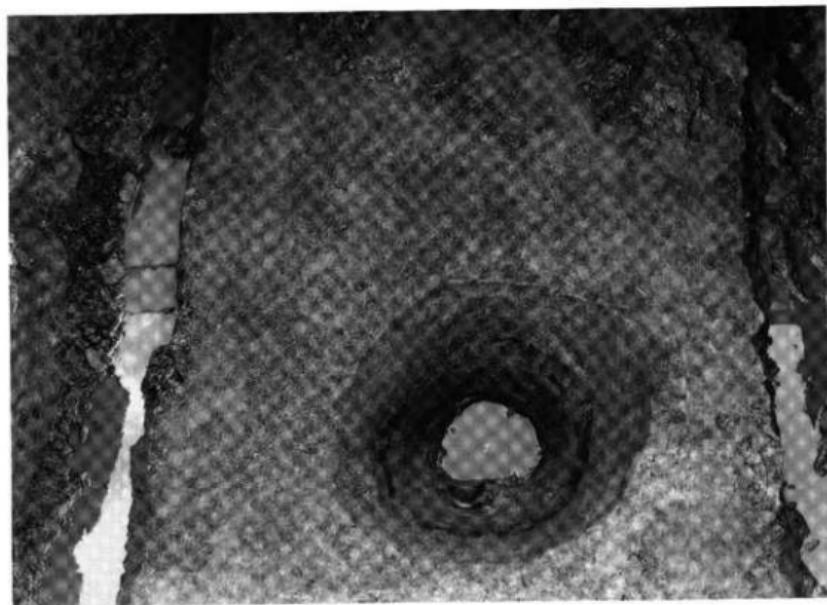
1. 円筒埴輪



2. 井戸跡



1. 遺構検出状況



2. 土坑



1. 調査狀況



2. 斜丸瓦



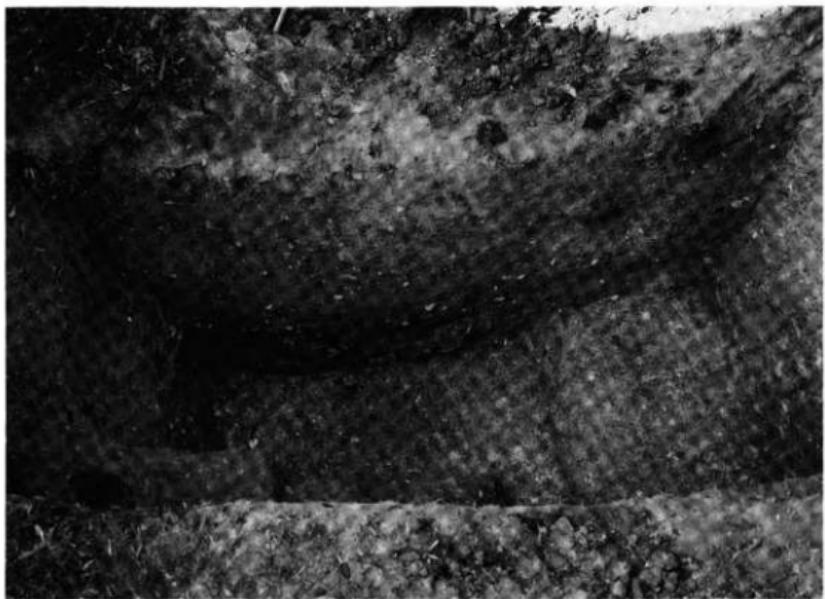
1. 遠景（北東より）



2. 外側土塁



1. 畜 現況



2. 掘 検出状況

昭和61年3月30日◎

天理市埋蔵文化財調査概報 (1986)

発行 稲葉集 天理市教育委員会
天理市川原城町 605番地

印刷 天理時報社
天理市稻葉町 80番地